

ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖と ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

佐藤 英

はじめに

1943年2月18日、ヨーゼフ・ゲッベルスはスポーツパラストにおいて演説した際に総力戦を宣言した。この宣言により、ドイツ国民は以前にも増して戦争に動員されることになったものの、戦局は悪化の一方で、国内においてもナチスに対する抵抗が強まっていた。1944年7月に起きたアドルフ・ヒトラーの暗殺未遂事件は、それまで政府から手厚い保護を受けてきた音楽文化にも大きな影響を及ぼした。この余波を受けて、この夏に予定されていたザルツブルク音楽祭が中止になったのである。ドイツ国内において、文化面での更なる総力戦強化を行う一策は、まさにこの直後に発表された。連合軍によるパリ解放の前日にあたる同年8月24日、ゲッベルスは劇場閉鎖を指示した。これは翌日の新聞各紙の1面トップで報道された。

本稿は、劇場閉鎖後、ドイツ国内のクラシック音楽文化がどのように変化したか、そしてその際に音楽家がラジオ放送のためにどのような活動を行ったかについて実証的に検証するものである¹。今回、考察の対象とするのは、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の活動である。周知のように、今日の「オーストリア」は1938年にナチス・ドイツによって併合されていた。このオーケストラは、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とともに、ナチス・ドイツのオーケストラ文化における最高峰の一つとして位置付けられていた。ベ

ルリン・フィルと異なるウィーン・フィルの大きな特徴は、オペラとコンサートの両方において活動を行うことにある。ウィーン国立歌劇場のオーケストラは、実質的にウィーン・フィルである。また、オーケストラのメンバーは積極的に小編成の室内楽コンサートも行っている。これらの事例が示すように、ウィーン・フィルとそのメンバーの活動は、ウィーンのクラシック音楽文化の中核を成しているのだ。それゆえ、劇場閉鎖後のクラシック音楽文化を検証する際、このオーケストラを中心に据えれば、少なくともウィーンにおける事例に関しては、重要な側面がカバーできると考えられる。

本稿で扱う期間は、1944年8月末から同年10月までの事例である。後に見るように、この間にウィーン・フィルが積極的に関与することになるのはラジオ放送である。したがって、今回の考察のメインとなるのは、このオーケストラが放送局の自主制作番組のために行った、無観客での録音ということになる。これが連日どのように展開されていたかについては、時系列で示す。これに加えて、実演においてウィーン・フィルがどのように活動したかについても、本稿においては確認を行う。劇場閉鎖という措置は、こうした公開公演の開催禁止を意味するものであるが、実際には、許可された少数の団体が軍需産業従事者への慰問コンサートを行うなどしていた。このような活動が様々な例外を許すことになり、最終的にはオペラは無理としても、少数のコンサートは開催できるようになる²。本稿で対象とする期間は、まさにそのような移行措置が行われつつあった頃に相当するのである。

先に述べたように、本稿の考察の主眼は劇場閉鎖後のウィーンの楽壇の実情に迫ることである。したがって、ラジオ放送以外にコンサートに関する事例を見ることになるのだが、本稿においては企画の段階で終わってしまった事例も扱っている。特に、仮に劇場閉鎖が実施されなかったとしたら、1944/45年のシーズンはどのようなものとなったかについて、1章を割いた。実現されなかったこのシーズンの計画も併せて視野に入れることにより、当時の聴衆の視点に立ちながら状況をイメージすることが可能になると思われる。

さて、本研究のために使用した資料について、述べておきたい。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏記録と放送記録については、このオーケストラのホームページに掲載されている演奏会記録を使用した³。これに加え、2017年3月に論者がウィーン・フィルハーモニー管弦楽団歴史アーカイブを訪問した際、アーカイブ担当のシルヴィア・カーグル博士より提供していただいた放送に関するデジタルデータも参照している。このデータは、基本的に同オーケストラのホームページで公開されているものと同じだが、先述の提供データにおいては、ホームページで公開されていない注記が含まれている。この注記には、ホームページ公開データを作成するにあたっての作業メモや、収録日に関する補足情報が記されている。これまでに発表した拙稿において述べたように、ホームページで公開されている放送録音の日付は、数日にわたって行われた場合、初日のみの掲載に限られている⁴。この掲載データだけでは、当時のこのオーケストラの活動の実情を把握できないため、本稿では2017年3月に得たデータの注記を積極的に用いた。この提供データを本稿において使用する場合には、ウィーン・フィルの「放送記録」に基づくという記載を本文内で示した。なお、これもすでに発表済みの拙稿において指摘したことだが、ウィーン・フィルのホームページにおいては放送のための演奏は「放送コンサート Rundfunk Konzert」という生放送を思わせる表記が用いられている⁵。ラジオ放送黎明期においては、たしかにそのようなケースが多く認められるが、本稿で扱う事例に関しては、そのすべてがテープ録音による収録日を指していることを明記しておきたい。

このウィーン・フィルの「放送記録」は、このオーケストラが所有する資料を批判的に検討した結果ではあるものの、他のアーカイブに所蔵されている資料の情報と差異が生じているケースがある。2017年にシルヴィア・カーグル博士より直接うかがったところによると、このオーケストラの放送記録には不十分なところがあるという。それゆえ、放送録音の実施日に関しては可能な限り複数の資料を照合し、情報に食い違いがある場合には論者の判断で妥当と思われるところを記した。具体的には、クレメンス・クラウスが残した自筆の演奏記録をはじめ⁶、市販された音源、放送局から提供された音源、それらの音源

の収録日等のデータ，他のアーカイブの文書等が比較のために用いられた。この検証に本稿ではかなりの紙数を費やしたが，それをあえて行ったのは，文化事象の論証する際に使用する基本情報に不備が認められる場合，アカデミックなアプローチによって補完作業を積み重ねるべきであるという，論者のスタンスを反映したためである。その意味では本稿は，基礎研究としての側面も有していることになる。

本稿で扱うコンサートのデータは，演奏会場のホームページで公開されている情報に基にしている。今回，データとして用いられたのはウィーン楽友協会⁷とウィーン・コンツェルトハウス⁸のものである。楽友協会のホームページのデータベースにおいても，同館で行われた無観客の放送録音について情報が記載されている。「放送コンサート Rundfunk Konzert」と区分されていることから，ウィーン・フィルから提供されたデータが使用されていると思われる。また，放送のための録音開始時刻は一律で22時とされているが，実情を反映していないため，本稿においてはこの時刻は採用せず，別資料で確認できたもののみを記した。

収録された音源の放送日については，ウィーン・フィルに記録が残されていないため，ナチスの党機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』のベルリン版を底本に論者が調査した。同紙で特定できない場合には他の資料を参照し，可能な限り多くの放送データを得るよう努めた。

1. 1944/45年のシーズンにウィーンで予定されていたコンサートとオペラ

1944/45年のシーズンに予定されていた演目については，1943/44年のシーズンが終盤に差し掛かっていた6月から発表された。最初に予定を公開したのは，ウィーン楽友協会である。同協会の主催コンサートでは，古典派とロマン派の作品をメインとし，マックス・レーガー，リヒャルト・シュトラウス，ハンス・プフィッツナー，フランツ・シュミット（生誕70年記念コンサートが企画さ

れた)、ヨーゼフ・マルクス、ユリウス・ヴァイスマン、ヴィルヘルム・イエ
ルガー、ドビュッシー、ラヴェル、ヤナーチェク、クレシミル・バラノヴィチ
の作品がプログラムを飾ることになっていた。シーズン開始はバッハの《マニ
フィカト》とブルックナーの《テ・デウム》である。1945年春にリヒャルト・
シュトラウス《ダフネのエピローグ》が、クレメンス・クラウス指揮ウィーン
国立歌劇場合唱団で初演されることも予定されていた。合唱作品としては、
マックス・レーガーの《世捨て人》とブラームスの《ドイツ・レクイエム》も
演目に入っていた。指揮者には、20回のコンサートが企画されていたヨーゼ
フ・カイルベルトに加え、ハンス・ドゥハン、ジョルジュ・ジョルジエスク、
オイゲン・ヨッフム、ゲオルク・ヨッフム、オスヴァルト・カバスタ、ハン
ス・クナッパーツブッシュ、クレメンス・クラウス、ハンス・ロスバウト、
マックス・シェーンヘルが登場するという。出演するオーケストラは、ウィー
ン・フィル、ウィーン交響楽団、プラハ・ドイツ・フィル、ミュンヘン・フィ
ル、リンツ帝国ブルックナー管弦楽団、帝国放送ウィーン局大管弦楽団である。
室内楽では、15回のソロコンサートのほか、シュナイダーハン四重奏団の数回
のコンサート、さらにシェーンブルン宮殿劇場における6回のセレナーデも計
画されていた⁹。

楽友協会と共にウィーンのクラシック・コンサートの中心地となるコンツェ
ルトハウス協会も、1944/45年のシーズンの計画を詳細に組んでいた。同協会
のコンサートにおいてメインとなるのは、ハンス・ヴァイスバッハ指揮による
ウィーン交響楽団による水曜夜の8回の定期演奏会である。古典派とロマン派
のスタンダードに加え、ヨーゼフ・マルクスの《古いウィーンのセレナーデ》、
フリードリヒ・ライディンガーの《アイヒェンドルフ組曲》、プフィッツナー
の《交響曲ト長調》、ラヴェル《ラ・ヴァルス》、マックス・トラップの《アレ
グロ・デチーソ》、フランツ・シュミットの《ピアノ協奏曲変ホ長調》(ソリス
トはフリードリヒ・ヴェーラー)といった近現代の作品、さらにブルックナーの
《交響曲第1番》、ローベルト・フックスの《セレナーデ ニ長調》、ドヴォル
ザーク《伝説から》といった演奏機会の少ない作品も含まれていた。この年が

生誕70年に当たるフランツ・シュミットの記念コンサートも4回あり、そのうちの1回では《交響曲第1番》と《交響曲第4番》がプログラムに入っていた。「暗闇のコンサート」もこのシーズンには引き続き企画され、シューベルトとブルックナーの未完成の交響曲、つまりシューベルトの《交響曲第7番》とブルックナーの《交響曲第9番》(ヴァイスバッハ指揮)、モーツァルトの《レクイエム》(カール・ベーム指揮、ウィーン国立歌劇場合唱団も出演)、バッハの《ミサ曲短調》(ハンス・シュレムス指揮)の演奏が予定されていた。合唱作品はこのコンサート・シリーズ以外にも演奏され、ヴェルディの《レクイエム》、ベートーヴェンの《ミサ・ソレムニス》、ブルックナーの《ミサ曲短調》と《テ・デウム》も演目になっていた。室内楽コンサートは、ベルリンのシュトループ四重奏団の客演のほかはウィーン・フィルのメンバーによるものが中心で、コンツェルトハウス四重奏団で8回、シュナイダーハンのアンサンブルで3回、セドラックとヴィンクラーで2回、ボスコフスキー・トリオで6回、さらにウィーン・フィルとウィーン交響楽団の管楽アンサンブルによる合計3回のコンサートもあった。ヴューラーによる6回のコンサート(このうちの5回はベートーヴェン・ツィクルス)は、ピアノ・ソロ・コンサートのハイライトとされていた¹⁰。

オペラ公演に関しては、ウィーン国立歌劇場とウィーン市オペラハウス(現在のウィーン・フォルクスオーパー)がこの時代においても重要拠点である。1944年7月12日の新聞の情報によると、国立歌劇場においては9月1日の新シーズン開幕後、プレミエ公演としてスイスの作曲家による2曲が上演されることになっていた。その2曲とは、フランク・マルタンのオラトリオ《魔法の酒》の舞台付き上演(オスカー・フリッツ・シュー演出)とハインリヒ・ズーターマイスターの《ロミオとジュリエット》(音楽監督のカール・ベーム指揮)である。その他、ハンス・プフィッツナーの《あわれなハインリヒ》も、作曲者の演出で改訂上演が計画されていた。また、ベームの指揮により、ワーグナーの《ニーベルングの指環》四部作を順次改訂していくことも計画されており、このシーズン中には《ワルキューレ》と《ジークフリート》の新演出が公開さ

れることになっていた。年明けには、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーの指揮による《タンホイザー》が予定されていた¹¹。指揮者陣には、ウィーン出身のヴィルヘルム・ロイブナーも含まれていた¹²。新シーズンが近づいた頃、国立歌劇場は8月20日にモーツァルト《後宮からの誘拐》でシーズンがオープンとなる旨が新聞に掲載された¹³。歓喜力行団による公演として、当日の18時30分から公演が開始されることになっていたものの¹⁴、予定されたこの日に上演が行われたことを示す記事は新聞各紙に認められない。

一方、ウィーン・オペラハウスは、新シーズンにはローベルト・ケルドルファーの《ヴェレーナ》初演のほか、改訂上演としてユリウス・ビットナーの《楽士》、リヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》、ヴェルディの《椿姫》、ヤナーチェクの《イエヌーファ》（パリ・オペラ座の舞台と衣装を用いた公演）、ヨハン・シュトラウスⅡ世の《こうもり》（この公演のみアルフレート・ヴァルターの指揮とある）、部分的な改訂上演としてキーンツルの《アルプスの牛飼いの娘》と《宣教師》、ロルツィングの《皇帝と船大工》、スメタナの《売られた花嫁》、ダルベールの《低地》、マスカーニの《カヴァリレア・ルスティカーナ》、レオンカヴァルロの《道化師》、ノルベルト・シュルツェの《黒いペーター》、プフィッツナーの《クリスマスの妖精》、フンパーディンクの《王様の子供たち》が計画されていた。バレエではハンス・ヨアヒム・ゾバンスキの《ガラス吹き工》なども演目に含まれている¹⁵。招聘が予定されていた指揮者は、ジョルジュ・ジョルジュスク、ヨーゼフ・カイルベルト、ロヴロ・フォン・マタチッチ、イオネル・ペルレアなどである¹⁶。

2. 劇場閉鎖とその影響

前述のオペラやコンサートの計画を中止に追い込んだのは、1944年8月25日に新聞に掲載された、劇場閉鎖に関するゲッベルスの指令だった。

戦争開始後5年目であっても、ドイツの文化生活の全ては、他の戦争

中の国々が平和な時でさえ達成しなかった規模で維持されてきた。イギリスとアメリカが、自国の最も重要なオペラやオーケストラ、その他の文化活動を、すでに戦争開始後まもなく停止したのに対し、ドイツにおける文化生活は、今日まで通常通りに、むしろそれどころか一部においては規模を拡大して続行されてきた。現在のドイツ国民の総力戦への動員は、この文化生活という領域でさえも徹底的な節制を必要不可欠にしている。¹⁷

上記はこの指令の冒頭部分である。ゲッベルスは他国との比較の状況を引き合いに出し、これまでドイツが戦争遂行中でも、高い文化レベルを保ってきたことを強調する。実際のところ、アメリカとイギリスで、戦争のためにオペラやオーケストラの活動が停止したという事例はほとんどなかったと思われる。総力戦をさらに強力に推し進めるための必然性を主張するため、他国の状況についての情報には故意に手が加えられているのである。

ゲッベルスは、こうしたドイツの文化レベルを維持するため、映画とラジオを積極的に活用すると述べる。「今後、前線及び新領土における兵士たちのためには、主として映画とラジオのみによって、息抜きを与え、文化的価値を伝えることになるだろう。これらのメディアは、最小限の人員と物資の経費で、我々国民の最大多数の心を捉えるのである」¹⁸。そして、そして、「徹底的な節制」を行うため、以下の追加措置の導入を告げる。

全ての劇場、ヴァリエテ、カバレット、演劇学校は、1944年9月1日までに閉鎖される。これに相当する同業者団体ならびに私設の演劇、歌唱、ダンスの授業も中止される。[…]

全てのオーケストラ、音楽学校、音楽大学は、ラジオによる放送プログラム実施にどうしても必要な精鋭の楽団を除き、芸術に関する活動を停止する。活動を停止した団体のメンバーは、閉鎖された劇団の団員たちと同じく、国防軍に引き渡されるか、あるいは軍備に動員される¹⁹。

ここで言われたラジオ放送のための「精鋭の楽壇」として想定されていたのは、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、シュターツカペレ・ベルリン、シュターツカペレ・ドレスデン、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ハンブルク国立フィル、プラハ・ドイツ・フィル、バイエルン国立歌劇場管弦楽団、リンツ帝国ブルックナー管弦楽団、そしてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団である²⁰。このほか、放送オーケストラもこの業務を担当することになったが、例えばウィーン交響楽団のように、この待遇から外れた場合には、そのメンバーは放送オーケストラに移籍するか、あるいは軍事関係の別の仕事に就くなどした²¹。活動可能なオーケストラと共演できた指揮者やソリストは、原則として「天賦の才能を持つ芸術家リスト」に名前のある人々だった²²。

先の追加措置は、1944/45年の音楽シーズンの開催目前だったウィーンの楽壇にも大きな影響をもたらした。例えば、楽友協会の場合、8月26日の新聞の広告欄によると、発注を受けた定期会員チケットは8月28日から配布する予定であった。それができなくなったため、1週間後にあらためて情報を掲載することになった²³。この間に主催者側は、規模を縮小するなど、開催の可能性を探っていたかもしれない。しかしこの1週間後、9月2日の広告欄において、配布可能なチケットは無いと告知された²⁴。

ゲッベルスによる指令が厳密に実施されるならば、ウィーン・フィルはラジオや映画以外の活動ができなくなることを意味していた。だが、実際にはそうはならなかった。様々な交渉の後、ラジオや映画以外でもこのオーケストラの公開演奏が許可されるようになったのである。1944年9月8日にこの決定をしたのは、ウィーン大管区長バルドゥール・フォン・シーラッハだった。これによりウィーン・フィルは、ラジオや映画のための演奏に加え、負傷者のための慰問、工場コンサート、軍需産業労働者や兵士のためのコンサート、さらには定期演奏会等の従来の公開コンサートにおいても活動が認められたのである²⁵。

1944年9月と10月初旬のウィーン・フィルの活動を見ると、劇場で行われたコンサートは4回、工場における慰問演奏は2回であった。劇場でのコンサートではウィーン国立歌劇場が会場となり、カール・ベームが指揮台に立った。

9月16日と17日には「ベートーヴェンの夕べ」(《レオノーレ》序曲第3番, ヴォルフガング・シュナイダーハンをソリストとする《ヴァイオリン協奏曲》, 《交響曲第7番》), 9月30日と10月1日にはヴェルディの《レクイエム》が演奏された。工場における演奏としては, 9月22日のルドルフ・モラルト指揮, ウィーン16区の工場における「休憩コンサート」(モーツァルトの《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》, ヴィリー・ボスコフスキーのヴァイオリンによるベートーヴェンの《ロマンス第2番》, シューベルトの《交響曲第7番「未完成」》, ヨハン・シュトラウスⅡ世のワルツ《美しく青きドナウ》), 9月28日のカール・ベーム指揮, ジーメンスの工場におけるコンサート(ニコライの《ウィンザーの陽気な女房たち》序曲, モーツァルト《ハフナー・セレナーデ》, エミー・ローゼのソプラノによるヨハン・シュトラウスⅡ世のワルツ《春の声》, 《こうもり》序曲)が開催された。

10月になると, ウィーン・フィルは負傷兵のためのチャリティーコンサート(10月12日, ヴィルヘルム・イェルガー指揮)や工場コンサート(10月27日はルドルフ・モラルト指揮)といった戦争関連行事に出演するだけでなく, 楽友協会大ホールにおける定期演奏会も再開させた。このオーケストラの定期演奏会は, 公開総練習——名目上は「練習」だが, 実際には通常のコンサートと同様に演奏される——と本番で2日間, 開催されていたが, 1944/45年のシーズンは3日間となった。最初の定期演奏会に出演した指揮者はヴィルヘルム・フルトヴェングラーである。10月14日から16日までの3回のコンサートでは, ベートーヴェンの《レオノーレ》序曲第2番とブルックナーの《交響曲第8番》が披露された。これに次いで定期演奏会を指揮したのは, クレメンス・クラウスである。彼は病気のハンス・クナッパーツブッシュの代役として登壇し, 10月28日から30日までの3回のコンサートでベートーヴェンの《交響曲第6番「田園」》, コダーイの《ガランタ舞曲》, ドビュッシーの〈沈める寺〉, リヒャルト・シュトラウスの《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》を指揮した。開催された定期演奏会は, 物資不足を反映したものとなった。1943/44年のシーズンには作成されていたプログラム冊子は作成されず, 聴衆が手にしたのは演奏者と曲目がタイプされたA4サイズの藁半紙1枚だった。

定期演奏会に加え、9月と同様に国立歌劇場においてもコンサートが続いた。10月の演目は、カール・ベームの指揮によるベートーヴェンの《交響曲第9番「合唱付き」》だった（10月21/22日）。

オーケストラの活動のほか、ウィーン・フィルのメンバーによる室内楽コンサートもたびたび行われた。例えば、コンサートマスターだったヴォルフガング・シュナイダーハンは、ウィーン出身のピアニストであるフリードリヒ・ヴェーラーとともに、10月6日にリサイタルを開いている。シュナイダーハンが中心となって結成されたシュナイダーハン四重奏団も、10月12日にコンサートを開催した。このコンサートで会場となったのは楽友協会大ホールである。楽友協会で開催される四重奏団のコンサートの場合、今日では収容客数が少ないブラームスザールが使用されることがもっぱらであるが、コンサートの回数を減らしていた時期だけに、大ホールが使用されたのであろう。コンツェルトハウスにおいても、ウィーン・フィルのメンバーは室内楽コンサートに出演している。ボスコフスキー・トリオ（10月21日と26日）、セドラック・ヴィンクラー四重奏団（10月24日）、ウィーン・フィル管楽アンサンブル（10月25日）、ウィーン・フィルハーモニア四重奏団（10月29日）、ウィーン・コンツェルトハウス四重奏団（10月31日）がそれに該当する。

このように見てくると、劇場閉鎖が行われたとはいえ、ウィーンにおいてはウィーン・フィルとそのメンバーを中心に、公開コンサートが何度も行われていたことがわかる。もちろん、それは当初予定されていた規模に比べれば、慎ましいものであったといえようが、空襲が激化するウィーンにおいて人々を慰める場になったであろう。

3. ウィーン・フィルとラジオ放送

先に述べたように、劇場閉鎖後、ウィーン・フィルの活動において重要度が増してくるのは、映画やラジオ放送のための仕事である。映画に関しては、オーストリア科学アカデミーのプロジェクトが明らかにしているように、1938

年のオーストリア併合以降、ウィーン・フィルが映画のBGMを演奏するために出演が求められていた²⁶。劇場閉鎖後もこの傾向に変わりはなく、ウィーン・フィルのメンバーであったオットー・シュトラッサーが回想しているように、映画のための録音中、空襲に見舞われたこともあったという²⁷。この話題は、彼の回想録において1944年9月からウィーンでも空襲が本格化したことを述べたところで紹介されていることから、時期的には本稿の考察の対象とする頃のものということになる²⁸。ウィーン・フィルが実際にどの映画に出演していたのか、また、出演に際してどのような勤務形態がとられていたかなど、このオーケストラと映画との関わりについては、今後の更なる調査が必要とされるところである。

ラジオ放送に関しては、様々な文書や放送に使用された音源等、活動の実情を把握するための資料が多く残されている。ここでは、その記録をもとに、1944年8月末から1944年10月までの事例を具体的に見ていきたい。また、この間にウィーン・フィルはレコード会社のための商業用録音の制作も行っているため、この件についてもあわせて言及する。

3.1 1944年8月末から9月の事例——ベーム、モラルト、クラウド、マタチッチ

1944年9月1日の劇場閉鎖の前後にラジオ放送のために収録が行われたものとして、ヴェルディの《オテロ》をあげることができる。ウィーン・フィルの「放送記録」には、同年8月31日にこのオペラのバレエ音楽が収録されたという情報が残されているにすぎないが、この前後に全曲が収録されたものと思われる。歌唱はドイツ語翻訳によるもので、出演者は次のとおりである。トルステン・ラルフ（オテロ）、パウル・シェフラー（ヤーゴ）、ヨーゼフ・ヴィット（カッシオ）、ペーター・クライン（ロドリゴ）、トミスラフ・ネラリッチ（ロドヴィーコ）、ヴィクトル・マーディン（モンターノ）、ローランド・ノイマン（伝令）、ヒルデ・コネツニ（デズデモナ）、エレナ・ニコライディ（エミーリア）、ウィーン国立歌劇場合唱団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、カール・

ベーム（指揮）²⁹。当初、この録音の第1幕は1944年10月19日に放送が予定されていた³⁰。実際に放送されたのは、ドレスデンで制作されたドヴォルザークの《ジャコバン党员》（エルメンドルフ指揮）だった³¹。その後、大戦中に放送されたか否かについては不明である。

この録音を制作した頃、音楽監督のベームは演奏のために人員確保すべく、ナチスの上層部と交渉をしていたようだ。この時期に問題になっていたのは、ウィーン国立歌劇場の合唱団である。この合唱団のメンバーに兵役に就くことができる男性が多数含まれていたため、どこまで人員を削減することができるかが議論の争点だった。1944年9月12日の報告書によると、ベームは合唱団の人数を97名から71名にする提案をしてきたものの、帝国放送協会のマルティン・シェーニケは48名と主張した³²。最終的にこの件は48名ということで決着したが³³、この時期にベームが置かれていた状況では、彼の主張を通すことは難しかった。歌手のエリーザベト・シュヴァルツコップの招聘を発端に、ベームはゲッベルスと対立していた。ベームの50歳の誕生日に際して検討されていた総支配人の称号を与える話が立ち消えになり、ひところはラジオ番組において彼の演奏の公開が禁じられたほどだった³⁴。ベームは50歳の誕生日を1944年8月28日に迎えたばかりで、ゲッベルスとの対立は彼の側近との交渉に際して影を落としていたはずである。いずれにしても、彼が合唱団の人員の問題に気を遣っていたことをうかがわせる録音が残されている。1944年9月18日にウィーン国立歌劇場合唱団とともに放送用に収録されたブラームスの《愛の歌》作品52がそれである。この作品では、オーケストラが出演するものではなく、H・ツイッペルとD・ロスマイヤーがピアノ伴奏を担当しており³⁵、主役となるのはまさに合唱団である。このような作品がこの時期に収録されたことに、この合唱団の存在意義を強くアピールするベームの思惑を読み取ることができる。

ベームの指揮による《オテロ》の収録後、ウィーン・フィルはコンツェルトハウス・モーツァルトザールにおいて、モーツァルトのオペラを2曲、ラジオ放送用に演奏している。これを指揮したのはルドルフ・モラルトで、演目は9

月4日と5日が《後宮からの誘拐》、9月6日と7日が《ドン・ジョヴァンニ》だった³⁶。現存する録音によると、《後宮からの誘拐》の出演歌手は次のとおりである。アントン・デルモータ（ベルモンテ）、エリーザベト・シュヴァルツコップ（コンスタンツェ）、エミー・ローゼ（ブロンデ）、ヘルベルト・アルゼン（オスミン）、ペーター・クライン（ペドリッロ）、ウィーン国立歌劇場合唱団³⁷。このオペラ全曲の放送日は不明だが、ハイライトは1944年10月26日21時から22時にドイツ各地の帝国放送局による統一番組（帝国プログラム）において放送されたことが新聞の情報によって確認できる³⁸。《ドン・ジョヴァンニ》の音源としては、アントン・デルモータの歌唱によるドン・オッターヴィオのアリア〈彼女の心の安らぎこそ〉が知られているものの³⁹、他の部分については存在が確認できない。また、放送日も不明である。

《ドン・ジョヴァンニ》収録の翌日にあたる9月8日に、ウィーン・フィルのコンサートマスターだったヴォルフガング・シュナイダーハンを中心に結成されたシュナイダーハン四重奏団が、放送のために録音を行っている。曲目は、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第14番である⁴⁰。この四重奏団は、オーケストラの放送録音の合間に、この後も演奏を重ねてゆくことになる。

9月中旬から、ウィーン・フィルはオペラに加え、オーケストラ作品の収録にも本格的に着手している。この種のレパートリーの収録に際して最初に起用された指揮者は、クレメンス・クラウスである。1944年9月10日にウィーン局のハンス・ザックスからクラウスに宛てた電報によると、最初のプロジェクトは1時間番組のために放送用録音を制作することだった。9月13日の14時から楽友協会での最初の録音を行う、プログラムの提案を至急求む、というのである⁴¹。実際に録音が行われたのはこのスケジュールではなく、9月18日の15時から18時⁴²、9月19日の9時から12時⁴³、9月21日の9時から12時⁴⁴、会場はウィーン楽友協会⁴⁵、報酬として毎日2000ライヒスマルク（このうち1000ライヒスマルクはテープ録音の報酬）がクラウスに支払われた⁴⁶。収録された曲目はハイドンの《交響曲第83番「めんどり」》、モーツァルトの《6つのドイツ舞曲》(K.571)、ベートーヴェンの《ロマンス》（ヴァイオリンはヴォルフガング・シュナ

イダーハン)、ビゼーの《アルルの女》第1組曲、ベルリオーズの《ファウストの劫罰》からの3曲(〈鬼火のメヌエット〉、〈妖精の踊り〉、〈ハンガリー行進曲〉)である⁴⁷。このうちモーツァルトの収録日は、クラウスの『指揮記録』により9月19日と特定できる。この記録では、時系列による公演のリストアップのほか、彼がどの作品をいつ初めて指揮したかを示すリストも記されている。モーツァルトの作品は、彼にとってこの時が初めての演奏だったため、先の日付とわかるのである。この時に収録された録音は、モーツァルトの作品を除き、1944年10月8日の21時から22時にドイツ放送(Deutschlandsender)でオンエアされた⁴⁸。この番組については、次のような批評がウィーンの新聞に掲載された。「彼[クラウス]のおかげで、魅力的でかわいらしいウィーンの古典的なオーケストラ音楽の名作であるハイドンのト短調交響曲《めんどり》を知ることになった。それは、快活な主題の着想に満ち、響きとリズムにおいて躍動的で、循環的な形式のまとまりにおいて見事である。同様の感謝の気持ちで、ヴォルフガング・シュナイダーハンによってアポロ的に奏でられたベートーヴェンの《ロマンス》は受け止められた。クラウスはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の自発的な支援を得ながら、ビゼーの《アルルの女》第1組曲から、生来の音楽的才能を持つこの楽長の、喜びが備わったリズムの独自性を引き出した。この楽長は、この種の音楽に特別な愛着を持ち、この音楽をふさわしい形で効果的に作り上げる術を心得ているのである。名人芸を発揮して演奏されたベルリオーズの《ファウストの劫罰》からの3つの作品についても、これと同様のことが言える。」⁴⁹

この放送で使用された音源の一部は、いまでもドイツに残されている。ベルリオーズの〈鬼火のメヌエット〉は収録日不詳とされるが、クラウスの演奏という表記がテープに添付された資料で確認できる⁵⁰。ハイドンについては、戦後、ソ連軍によってベルリン局から接收された1462本の録音テープの中に、指揮者不明、1944年9月7日のダビングとするものがある⁵¹。実際の演奏記録とは異なるものの、演奏頻度が低いこの作品の録音テープに1944年9月のデータがつけられていること、音源を視聴したところウィーンの演奏スタイルを想起させ

ることを踏まえると、これをクラウスのものとみなすことは可能と思われる⁵²。

劇場の閉鎖が行われたことにより、以前にも増してラジオ放送においては多様なプログラムが編成されるようになった。頻繁に放送されたものの一つに、演奏時間が概ね1時間程度のオペラがあった（番組情報等においては、ジングシュピールのシリーズとされた）。1944年9月以降、ウィーン・フィルもこの種の作品を毎月、ラジオ放送用に収録している。このオーケストラを起用したジングシュピールの録音では、演奏される機会が少ない作品が取り上げられた。同年9月19日と9月20日に収録された作品も、そうした例の一つである。この時に指揮者に迎えられたのはロヴロ・フォン・マタチッチで、演目はグルックのオペラ《だまされた回教の裁判官》だった。ユーゴスラビア出身のこの指揮者は、1965年以降、NHK交響楽団にもたびたび客演し、日本においても高い知名度を得ることになるが、このころは帝国放送ウィーン局の番組にしばしば出演していた。そうした彼の活動の一端を物語るのが、先に言及したモスクワからベルリンに返還されたテープの中に含まれているベネデット・マルチェッロの《ヴァイオリン協奏曲へ長調》作品1-4（ウィーン交響楽団、収録日不詳）⁵³、1944年10月11日に収録されたブラームスの《ラプソディ》作品79の第1番をオーケストラに編曲したもの（オーケストラは不詳）の録音である⁵⁴。件のグルックのオペラは、クラウスの録音と並行して制作が進められた。リハーサルは9月18日の9時から12時に楽友協会大ホール、録音は9月19日の16時から19時には第1部、9月20日の16時から19時には第2部が放送局の第1スタジオで行うというスケジュールだった⁵⁵。この演奏に参加した歌手はエミー・ルーゼ、ヘニー・ヘルツェ、エミー・フンク、アントン・デルモータ、エーリヒ・クンツ、アロイス・フェルナーシュトルファー、フランツ・エツメリヒである⁵⁶。演出はローター・リーディングーが担当した⁵⁷。この録音は1944年10月25日の21時から22時にドイツ放送を通じて公開され⁵⁸、マタチッチの指揮に認められた「熟練による卓越性と様式に忠実な軽やかさ」を高く評価する旨が新聞に掲載された⁵⁹。

クラウスとマタチッチとの共演の後、ふたたびカール・ベームがウィーン・

フィルと放送用の演奏を行った。ウィーン・フィルの「放送記録」によると、会場はコンツェルトハウス・モーツァルトザールで、9月22日にはシューベルトの作品（《ロザムンデ》から〈間奏曲〉と〈バレエ音楽〉、歌曲〈全能の神〉、歌曲〈君はわが戀い〉、歌曲〈セレナーデ〉、ヒルデ・コネツニのソプラノ）、翌23日にはシューベルトの《5つのドイツ舞曲》、ヨハン・シュトラウスⅡ世の《こうもり》序曲、《常動曲》、ワルツ《朝の新聞》、《皇帝円舞曲》が録音されたという。しかし、ウィーン・フィルから帝国放送ウィーン局に送付された制作経費の請求書によると、9月22日と9月25日にそれぞれ1日2回のセッションが行われたことが示唆されている。同文書においては、セッション毎の総額が具体的に示されており、9月22日の1回目のセッションは12400ライヒスマルク、2回目のセッションは4200ライヒスマルク、9月25日の1回目のセッションは6400ライヒスマルク、2回目のセッションは3350ライヒスマルクである。この文書はタイプされたもので、ドイツ語の本文中の誤植には鉛筆書きで訂正が書き込まれているものの、日付にはその書き込みが無い⁶⁰。つまり、この日付には誤りがないということになる。

この計算書は、この時のベームとの活動の実情を物語っているように思われる。考えても見れば、ラジオ番組用の収録とは、出演者に加え、放送局の番組制作者（責任者や収録の技術スタッフ）も関与するプロジェクトである。放送局側でも、この仕事が実際に執行されたか否かを証言できる人は多い。それゆえ、請求書の日付に虚偽が含まれることはあり得ず、実際の収録は9月22日と25日に行われたと考えるのが妥当である。この変更が生じた事情として、収録に係る人員の休日をいかにして確保するかという問題が想定できる。1944年9月以降、ウィーン・フィルと放送局が連日、収録を行うことが日常化した際、この問題は大きかったのではないか。この観点から先のスケジュールを考えた場合、9月23日が土曜日であったことが注目されよう。これまで見てきたように、9月18日から22日にかけては終日、録音が行われ、一日も休みがない。休日の確保という観点から事例を検討した場合、1944年11月28日から12月5日にかけて放送用に収録されたベーム指揮によるワーグナーの《ニュルンベルクの

マイスタージンガー》全曲も重要な示唆を与えてくれる。この期間中、12月2日と2日には収録が行われなかったのだが、まさにこの2日間は土曜日と日曜日だったのである。その他の録音についても、1944年9月以降のものはおおむね月曜日から金曜日になっており、この原則から外れる場合には連続勤務が週5日に収まるようにスケジュールが組まれている。今回のように、ベームとの録音の場合には、彼は音楽監督としての任地がウィーンであったため、客演指揮者とは異なり、当地の関係者の休暇に配慮が求められたためと思われる。また、それを可能にするスケジュールの余裕もあったのだろう。

9月下旬にベームとウィーン・フィルによって収録された音源のうち、シューベルトの作品は1945年1月7日の18時からの帝国プログラム「ドイツの巨匠による不滅の音楽」で放送された。番組での曲順は、最初が《ロザムンデ》で、「心のこもった表現」によって演奏された3曲の歌曲の後、《5つのドイツ舞曲》が続いた⁶¹。この演奏は、ウィーンの音楽評論家の耳には「ウィーンとその不滅の音楽に対する、唯一無二の祝祭的に喜ばしく鳴り響くデュオ・ニュソス賛歌」に聞こえたという⁶²。この番組で使用された録音テープは現在も残されており⁶³、録音の状態も良好であるため、今後、広く公開されることを期待したい。ヨハン・シュトラウスの4曲の録音については、放送日を特定することはできないものの、市販されたディスクでこのうちの2曲に接することができる。その一曲は《こうもり》序曲で、1950年代にアメリカのレコード会社によってLP化された⁶⁴。もう一曲の《常動曲》は、ウィーン・フィルが監修した創立150年記念CDコレクションの「ウィenna・ワルツ集」の一部となった⁶⁵。なお、前者の《こうもり》序曲はドイツ放送アーカイブにも収録日不詳の録音として残されている⁶⁶。1944年4月にもベームは《こうもり》抜粋を録音しており、序曲の録音はこの折のものとする見解もあるが⁶⁷、これは誤りだろう。4月の録音は楽友協会大ホールで行われたが、市販されたレコードやドイツ放送アーカイブの音源から聞き取れるのはこの大ホール特有の豊かな響きではなく、9月に会場に使用された700名程度の客席数で残響が短いコンツェルトハウス・モーツァルトザールのものだからである。

9月末になると、商業用レコードのためのセッションが行われている。この時の出演者は、指揮者がエルヴィン・バルツァー、歌手がヒルデ・コネツニ、アニー・コネツニ、エリーザベト・ヘンゲン、エミー・ローゼ、マリア・ヒットオルフ、ペーター・クライン、ヴィリアム・ヴェルニックだった。9月29日のセッションでは、リヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》、ワーグナーの《ローエングリン》、ビゼーの《カルメン》からの名場面が録音された⁶⁸。

3.2 1944年10月の事例——フルトヴェングラー、ベーム、クラウス、マタチッチ、カバスタとの共演

1944年10月前半のウィーン・フィルのスケジュールは、決定までに変更が相次いだ。9月30日付のウィーン・フィルの予定表によると、10月2日、3日、4日の18時から21時、10月5日の9時から12時にワーグナーの《タンホイザー》、10月9日の18時からと11日の17時から20時にヴェルディの《レクイエム》の収録が計画されていた。さらにこの予定表を見ると、10月5日の夕方にはヴェルディの《レクイエム》の公演、10月6日から8日まで国立歌劇場におけるベートーヴェンの《交響曲第9番》のリハーサル、10月10日の19時から同曲のコンサートが予定されていたことも記されている⁶⁹。この計画は全面的に変更された。10月9日の帝国放送協会ウィーン局からウィーン・フィルに送付された文書においては、《タンホイザー》は10月13日と14日の18時から21時、15日の19時から22時、16日の9時から12時、《レクイエム》は10月17日と18日の18時から21時に、いずれも楽友協会大ホールで収録予定とある（指揮者はベーム）⁷⁰。この日程変更の後、さらに調整が行われ、結局のところ《タンホイザー》と《レクイエム》は10月の収録から外されたようだ。ウィーン・フィルの1944年10月の「放送記録」にこの2曲はなく、ヴェルディの《レクイエム》は1945年2月5日にあらためて収録する機会が設けられているからである。

10月の収録がこのような結果に落ち着いた経緯は、いささか複雑だ。まず考えられることとして、10月上旬のヴェルディの《レクイエム》の公演は行われず、ベートーヴェンの《交響曲第9番》も10月21日と22日になっていることか

ら、このプロジェクトに関係する歌手が病気になったことが挙げられる。10月9日の変更案はこの事情を受けたものと思われるが、このスケジュールには致命的な問題があった。先に見た10月9日の文書には、10月15日にフルトヴェングラーの指揮で予定されていた楽友協会における定期演奏会の演目から、ブルックナーの《交響曲第8番》がライブ収録される予定であったことも記されている⁷¹。問題は、このフルトヴェングラーのコンサートが19時開演だったことである。10月9日付のプランが実行された場合、ウィーン・フィルは10月15日の19時から楽友協会大ホールにおいて、フルトヴェングラーのコンサートとベームによる《タンホイザー》の録音を同時に行うことになってしまう。さらに言えば、フルトヴェングラーのコンサートは14日の19時からも予定されており、ここでもダブルブッキングの問題が起きていた。このように、この時期に《タンホイザー》を録音することは、もとより不可能だったのである。この問題は帝国放送協会の番組編成者会議でも「フルトヴェングラーの録音」として報告されている。番組制作担当のゲルハルト・フォン・ヴェスターマンがウィーンへ赴き、事態の收拾にあたったようだ⁷²。計画の再調整の過程でフルトヴェングラーのコンサートをライブで収録する計画が見直しとなり、10月17日に無観客でブルックナーを放送用に演奏することになった。当初、この日とこの翌日には、フルトヴェングラーがウィーン・フィルと商業レコードのために録音することが計画されていた。放送用の録音が優先されたためか、あるいは他の理由のためか定かではないが、この商業用レコードのための仕事はキャンセルになった⁷³。ヴェルディの《レクイエム》の録音は、時間の上ではフルトヴェングラーのコンサートとバッティングしていなかったものの、気難しい彼を刺激することを避けたのか、あるいは依然として歌手に問題があったためか、理由は判然としないが、時期を改めることになったのだろう。

フルトヴェングラーの指揮でブルックナーの放送用録音が予定された10月17日の正午ごろ、ウィーンは空襲に見舞われた⁷⁴。クラウス・クリスティアン・ヴェーグルの調査によると、この日の空襲でウィーン市内の5か所の映画館が被害に遇っている。楽友協会に比較的近いところでは、マリアヒルファー通り

にあった「シュヴェンダー」とプラター通りの「ネストロイ」がそれに該当し、前者は完全消失、後者も甚大な損傷を蒙った⁷⁵。楽友協会近くのカールス教会でも被害が出たものの⁷⁶、ブルックナーの収録は滞りなく行われた⁷⁷。

この演奏は1944年11月19日の18時から19時20分に帝国プログラムのラジオ番組シリーズ「ドイツの巨匠による不滅の音楽」を通じて、全ドイツに届けられた⁷⁸。放送後、この番組はナチスの機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』のベルリン版において、戦時中ならではの比喩を用いて絶賛された。この交響曲は、「ドイツ的な本質のイメージ」を有しているがゆえに、第1楽章における「運命との格闘」から始まり、様々な形で形を変えながら、第2楽章のスケルツォと第3楽章のアダージョを経由し、フィナーレに当たる第4楽章の「力強い建造物」へと到達する。このフィナーレは「凱旋門」に喩えられるもので、「崇高さを伴った勝利の掉尾」を飾るものとなる。この演奏でフルトヴェングラーがなしえたのは、このような「主題の表現の情熱的な大きさを響きの中に移し替える」ことであり、ウィーン・フィルもこの演奏で「輝かしい音と深い感動を湛えた描写」を行っていたというのである⁷⁹。これに対し、同紙のウィーン版においては、評者（フリードリヒ・バイヤー）がベルリン版を読んでいたためと思われるが、「オーストリア」の作曲家ブルックナーを「ドイツ」的にとらえることにためらいがあったようだ。加えて、この評者は実際のコンサートを会場で耳にしており⁸⁰、ラジオではこの壮大な作品の魅力の片鱗しか伝わらないという思いを抱いていたこともあっただろう。それゆえ、音楽そのものの諸要素を盾に、読者を煙に巻くような批評が掲載された。「ラジオの聞き手には、苦渋の選択があった。壮麗な形式的構成、主題の組み立てにおける表現力、あるいは音の美しさと多彩さのいずれを良しとするかという選択である。もっとも、このような3つの構成要素は、ひとつにまとまることで比類のない効果をもたらしたのだが。」⁸¹

さて、予定の変更が相次ぐ中、カール・ベームも放送用の録音を行っている。フルトヴェングラーの録音と時期は前後するが、10月12日の19時から22時にコンツェルトハウス・モーツァルトザールにおいて、フリードリヒ・ヴェーラー

のピアノでグリークの《ピアノ協奏曲》が収録された⁸²。また、《タンホイザー》と《レクイエム》の録音が立て続けにキャンセルになったため、ベームの予定が空き、10月18日にドヴォルザークの《交響曲第9番「新世界から」》の放送用録音も行われている。ただし、この日だけでドヴォルザークの収録は完了しなかったようだ。10月25日に行われたベームによる放送用録音では、プフィッツナーの《ハイルブロンンのケートヒェン》の序曲と共に、ドヴォルザークの当該の交響曲も収録されているからである。グリークの《ピアノ協奏曲》は、前年に収録されたシューベルトの《交響曲第7番「未完成」》とともに、1944年12月26日の18時から19時に帝国プログラム「ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団演奏会」において放送された⁸³。演奏評によると、ヴューラーの演奏に備わった「華麗な音色と力強いリズム」が印象的だった⁸⁴。ドヴォルザークのほうは、1945年1月26日の21時から22時にドイツ放送の番組「カール・ベーム指揮、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団演奏会」において、1943年に収録されたりヒャルト・シュトラウスの《ホルン協奏曲第2番》とともに放送された⁸⁵。

クラウスとウィーン・フィルによる放送用の仕事は、10月にも続行された。10月9日に帝国放送ウィーン局のハンス・ザックスからウィーン・フィルに発信された文書によると、クラウスが担当する録音として、10月20日の18時から21時にコンツェルトハウス・モーツァルトザールにおけるリヒャルト・シュトラウスの《ブルレスケ》(ヴァルター・ギーゼキングのピアノ)、10月21日の9時から11時に楽友協会大ホールにおけるリヒャルト・シュトラウスの《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》(以下、《ティル・オイレンシュピーゲル》)が予定されていた⁸⁶。このうち、《ブルレスケ》はソリストをヴィンフリート・ヴォルフに変更し、10月30日にコンツェルトハウス・モーツァルトザールにおいて収録された⁸⁷。一方、《ティル・オイレンシュピーゲル》の収録情報は資料によって異なっている。ウィーン・フィルの「放送記録」によると、この交響詩は予定通り、10月21日に楽友協会大ホールにおいて録音されたことになっているが、クラウスの『指揮記録』では10月26日である。また、現

存する録音テープのデータによると、収録日は10月20日とされている⁸⁸。

《ティル・オイレンシュピーゲル》に関しては、録音テープに添付されていた10月20日の可能性は排除できるように思われる。ウィーン・フィルの「放送記録」、クラウスの『指揮記録』のいずれに依拠しても、この日にモーツァルトの《セレナーデ第9番ニ長調「ポストホルン」》（以下、《ポストホルン・セレナーデ》）が放送用に録音されたことが確認できるからだ。ウィーン・フィルの「放送記録」によると、このモーツァルトの収録で用いられた会場はコンツェルトハウス・モーツァルトザールである。厄介なことに、モーツァルトの収録日も資料により相違がある。ウィーン・フィルの「放送記録」が示す10月20日だけで収録が終わったのか、あるいはクラウスの『指揮記録』にあるように、この日に加え10月21日にも時間を要したか、そのどちらの見解を取るかで、シュトラウスの件も捉え方が変わってくるのだ。

すこし遠回りになるが、ドイツ放送アーカイブに残されている《ポストホルン・セレナーデ》のテープについて言及し、検証の材料を得ることにしたい。現存するのは、この作品の第1～3楽章と第7楽章だけで、演奏時間は26分50秒、収録日は不詳とされている。ドイツ放送アーカイブの音源は原本ではなく、戦後、19cm/秒のオープンリールテープにコピーされたもので、この元になったものはK395/98と番号が付された4本の放送局所有のテープである。この4本のテープに4つの楽章が収録されていたことを考えると、各テープに1楽章ずつ収録されていたことになる。しかも、連続した番号を持つ4本のテープであることから、K395/9が作成された段階で、第4～6楽章はカットされていたことになる⁸⁹。

このカットされた楽章をどのようにとらえるか、その可能性は二つあるように思われる。第一の可能性は、実際には第4～6楽章は収録されず、クラウスが記録していた2日間の収録期間は誤りで、ウィーン・フィルの記録にある日付が事実を反映しているというものである。第二の可能性は、クラウスの記録が正しく、2日間で全曲が収録されたものの、現存するテープは番組の時間にあわせてダビングされたものということである。現時点では、いずれが正しい

かを判断できる更なる資料も、テープの使用目的の裏付けとなる放送に関するデータも得られないが、以下の理由から、第二の可能性が高いように思われる。

まず注目したいのは、テープの整理番号 K395/9 に含まれている K というアルファベットである。これは、番組制作を担当した部署を示すと考えられる。1942年3月に番組制作部署として設置された10のグループのうち、「重厚であるがゆえに知られていないクラシック音楽」を担当したのがグループ K で、例えば1942年のザルツブルク音楽祭で録音されたモーツァルトの管弦楽曲を番組で数多く活用したのもここである⁹⁰。ドイツで保存されていた《ポストホルン・セレナーデ》のテープは、番組の担当部署を暗示する記号によって管理されていたのであれば、グループ K 担当の番組送信用に編集されたものとみなすことが可能である。この種の録音テープがダビングされたものであることは、他の事例から状況証拠を得ることができる。例えば、ゲオルク・ルートヴィヒ・ヨッフム指揮、リンツ帝国ブルックナー管弦楽団によるブルックナーの《交響曲第7番》は、1944年4月20日のヒトラーの誕生日を祝うためにウィーン局からラジオ放送された後、コピーテープがベルリンに送付された。再放送に備えるためだった⁹¹。この事例が示すように、ウィーン局のオリジナルテープがドイツ側に来ることはなかったのである。

次いで着目したいのは、当時のウィーンにおける放送録音の慣習についてである。ウィーン・フィルのオーケストラ作品のための放送録音セッションでは、1回につき20分から30分程度、オペラ等の合唱や歌手が参加する作品の場合は40分から60分程度の録音が制作されるケースが多い。その慣例に従えば、演奏時間が45分程度の管弦楽作品である《ポストホルン・セレナーデ》の収録には2日を要したと考えるのが妥当である。

以上のように、《ポストホルン・セレナーデ》の収録日に関してはクラウスの『指揮記録』の記録に信を置いたことになるわけだが、ここでこの自筆資料の信頼性について確認しておきたい。本稿でたびたび典拠にしているクラウスの『指揮記録』とは、彼の自筆で公演の日付と演目が時系列で書き留められたものである。記載に当たっては、万年筆と思われる筆記具と、ハードカバー製

の表紙を持つ罫線付きのノートが使用されている。1944年10月の記録に関しては、20日と21日の《ポストホルン・セレナーデ》の放送録音、10月23～25日のテレフンケン・レーベルのための録音（この録音については後述する）、26日の《ティル・オイレンシュピーゲル》の放送録音、28日から30日にかけての定期演奏会出演が同一ページ内に順に記されている。途中から割込みで記入された形跡はない。インクの濃淡は、20日と21日はほぼ同一、23日から25日は書き始めと思われる日付が20日と21日よりかなり濃い。26日の分についてはインクが25日よりわずかに薄い、20/21日より濃い。一方、28日の分は日付の書き始めにインクが強く出ていることが認められる。このようなインクの濃淡に着目すると、まず20日と21日が『指揮記録』に書き込まれ、時間的間隔を置いた後、23～25日と26日の放送録音がおそらく一度で執筆された可能性が高い。28～30日の分は、26日を記入した後、時間を経てから書き込まれたと思われる。データの記載が時系列であること、時間を空けて個々の項目が記された痕跡があること、途中から割りこみで書き加えられた形跡がないことから、少なくとも1944年10月の分に関しては、クラウスは実際に行った仕事を完了後に『指揮記録』に日記のように書き留めていったと考えてよいだろう。特に20日と21日に関しては、直前まで収録曲目が決まらず、事前に曲目を記入することが難しかったという事情がある。もし計画段階で書き込みがなされたとすれば、21日は《ティル・オイレンシュピーゲル》となるはずだが、実際にはそうっていない。この点を考慮しても、クラウスの『指揮記録』は、計画段階の情報が記されたものではないと言えるのである。また、もし作品の抜粋収録となったならば、その旨が『指揮記録』に記されるはずだ。特に、現存するテープに収録されていなかった第6楽章は、この作品が《ポストホルン・セレナーデ》と呼ばれる理由となった、まさにそのポストホルンが楽器として用いられている唯一の楽章なのである。この作品を特徴付ける楽章を欠いた状態で録音を終えるということは、まずあり得ないのではないだろうか。

以上の点を踏まえると、クラウスの記録にあるように、《ポストホルン・セレナーデ》は10月20日と21日、《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないた

ずら》は10月26日に収録されたと考えられる。念のために述べると、これらの3日間にウィーン・フィルは他の指揮者と演奏しておらず、この時に収録のための時間を設けることは可能だった。そもそも、10月28日から30日にクラウスがハンス・クナッパーツブッシュの代役として出演したウィーン・フィルの定期演奏会においては、《ティル・オイレンシュピーゲル》がプログラムの最後で演奏されており、リハーサル中にこの曲を録音することが可能な状況でもあった。

こうして完成された《ティル・オイレンシュピーゲル》の録音は、先に言及した《ブルレスケ》とともに、1945年1月28日の18時から19時の帝国放送のシリーズ番組「ドイツの巨匠による不滅の音楽」で公開された。この回はこのシリーズの第50回目で、リヒャルト・シュトラウスの特集が組まれた。ちなみに、この第1曲目を飾ったのは、作曲者の指揮、ウィーン・フィルの演奏による《ドン・ファン》だった⁹²。《ポストホルン・セレナーデ》に関しては、放送日は不明だが、現存するテープの演奏時間から推測するに、30分程度の番組であったことが想定できる。

さて、10月下旬にクラウスは放送用の仕事に加え、テレフンケン・レーベルへの市販用レコードのための録音も行っている。テレフンケンが提案したのは、9月26日の手紙ではヨハン・シュトラウス二世の《騎士パスマン》のバレエ音楽、ワルツ《春の声》、ベルリオーズ《ファウストの劫罰》から〈鬼火のメヌエット〉と〈妖精の踊り〉、J.S. バッハのブランデンブルク協奏曲（ただし第4番以外のいずれか）、リヒャルト・シュトラウス《ばらの騎士》のワルツ、ランナーのワルツ《宮廷舞踏会》、エネスコの《ルーマニア狂詩曲第1番》とドビュッシーの〈沈める寺〉だった⁹³。10月2日の手紙では、先の作品に加え、シューベルトの3曲の交響曲（第5、7、8番）、あるいはモーツァルトの4曲の交響曲（第32、33、39、41番）も候補になった⁹⁴。最終的に選ばれたのは次の3曲である。クラウスの『指揮記録』によると、10月23日から25日までの3日間でエネスコの《ルーマニア狂詩曲第1番》とドビュッシーの〈沈める寺〉（ビュセール編曲）、11月1日にヨハン・シュトラウス二世のワルツ《春の声》

が録音された。ドビュッシーとヨハン・シュトラウスの録音は未発売のままに終わっているが、後者の音源はドイツ放送アーカイブに保存されている⁹⁵。

ベーム、フルトヴェングラー、クラウスの録音のほかにも、この時期に実施された放送用の録音がある。ロヴロ・フォン・マタチッチの指揮によるシューベルトのオペラ《謀反人たち》のラジオ放送用の録音はそうしたものの一つだった。これも前節でも扱ったジングシュピールのシリーズの一環で、今回の出演歌手はイルムガルト・ゼーフリート、エミー・ローゼ、オリガ・レフコ＝アントツシュ、アントン・デルモータ、エーリヒ・クンツ、番組制作を担当したのはロータル・リーディングーである⁹⁶。録音には10月19日の15時30分から18時30分、20日の14時30分から17時30分までの2日を要したが、これに先んじて10月18日の15時から17時にはピアノによるリハーサル、17時から19時には朗読や台詞のリハーサルも、本番と同じ放送局の第2スタジオで行われた⁹⁷。この録音は、1944年11月22日の21時から22時に、ドイツ放送と帝国放送ウィーン局の同時放送で公開された⁹⁸。この放送でもマタチッチの手堅い指揮ぶりが評価された⁹⁹。このほか、オスヴァルト・カバスタの指揮で、10月23日にはレスピーギの《グレゴリオ聖歌風協奏曲》（パウル・リヒャルツのヴァイオリン独奏）、10月24日にはフランツ・シュミットの《軽騎兵の歌による変奏曲》が放送用に録音されている。これは、1944年12月22日の21時から22時に、ドイツ放送の番組「オスヴァルト・カバスタ指揮、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団演奏会」において放送された¹⁰⁰。

オーケストラのメンバーによる録音も、10月中に行われている。シュナイダーハン四重奏団は、少なくとも2曲を放送スタジオで演奏したことが確認できる。10月4日にはブラームスの《弦楽四重奏曲第1番》、10月31日にはシューマンの《弦楽四重奏曲第3番》が演目となった¹⁰¹。

3.3 1944年8月以前に収録された音源に基づくラジオ番組

これまで見てきた1944年9月と10月にウィーン・フィルが放送用に収録された録音の場合、最短では1か月ほどで、ドイツ国内のラジオ番組で公開されて

いた。実際のところ、ラジオ番組においてこのオーケストラが登場する機会は、こうした「新録音」以外にもあった。ウィーン・フィルは劇場閉鎖以前にも放送のために数多くの収録に携わっており、そのコンテンツは9月以降のラジオ番組においても使用されていたのである。ここでは、1944年9月と10月の番組においてそのような録音が活用された例を、これまでの調査で明らかにできた限りで見たい。

1944年9月以降の最初の事例と思われるのは、クレメンス・クラウス指揮によるベートーヴェンの《ミサ・ソレムニス》である。放送は9月3日の18時からの帝国放送の番組「ドイツの巨匠による不滅の音楽」において行われた¹⁰²。この録音は1940年11月に無観客で収録され、同年11月24日に放送されたことのあるものだった¹⁰³。この「不滅の音楽」のシリーズの1944年10月22日の番組においてメインとなったのは、ハイドンの《四季》から〈秋〉である¹⁰⁴。これは、クラウスが担当していた「フィルハーモニッシェ・アカデミー」の一環として1942年6月にウィーン楽友協会大ホールで観客を入れずに収録されたコンテンツで¹⁰⁵、1943年9月26日に放送されていたものである¹⁰⁶。クラウスの指揮によるものとしては、1944年9月5日20時15分からのドイツ放送におけるシリーズ「大コンサート——永遠のヨーロッパ」で取り上げられたヴェルディの《スターバト・マーテル》も挙げられる¹⁰⁷。1943年11月に「フィルハーモニッシェ・アカデミー」に際して放送用に収録されていた録音である。また、1944年10月13日の21時から22時のドイツ放送の番組においては、ケルビーニやハイドンの作品とともに、同年4月収録のヴァルター・バリリをヴァイオリン独奏に迎えたモーツァルトの《ヴァイオリン協奏曲第4番》がオンエアされることになっていた¹⁰⁸。

ウィーン国立歌劇場音楽監督の任にあったカール・ベームの録音についても、これまで放送されたことのあるものがラジオの電波に乗っている。オペラ座の音楽監督としての存在を示したのは、ベートーヴェンの《フィデリオ》全曲である。これは、9月24日の15時30分から18時までのドイツ放送の番組でオンエアされた¹⁰⁹。10月15日に帝国プログラムで放送された「ドイツの巨匠による不

滅の音楽」のブラームス特集においても、ベームの指揮による演奏が番組の一部をなした。ヴォルフガング・シュナイダーハンとリヒャルト・クロチャクをソリストに迎えて1943年に収録された、ブラームスの《ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲》がそれである¹¹⁰。

このほかの指揮者による番組としては、10月8日の11時40分から12時30分にドイツ放送でオンエアされたヴィルヘルム・イェルガー指揮による室内楽コンサート（1944年収録）¹¹¹、1944年10月12日の21時から21時40分に帝国プログラムでモラルト指揮によるペルゴレージの《奥様女中》（1942年収録）があった¹¹²。ウィーン・フィルの「放送記録」によると、イェルガー指揮による番組で取り上げられたのは、主に17世紀と18世紀に活躍したオーストリアにゆかりのある作曲家の作品だった。1944年5月22日と23日にコンツェルトハウス・モーツァルトザールで収録されたもので、以下に示すように、演奏される機会が少ない曲が集められていた。5月22日：モーツァルトの《行進曲》（3曲）、ディッターズドルフの《序曲》、ヴァーゲンザイルの《交響曲ニ長調》、ハイドンの《ピアノ協奏曲》。5月23日：フックスの《パルティータ》、シュタルツァーの《ディヴェルティメントイ短調》。ペルゴレージの《奥様女中》も演奏頻度が高い作品ではなく、演奏時間約60分のこの作品のためにウィーン・フィルは5時間半を費やしてリハーサルと録音を行っていた¹¹³。

ウィーン・フィルのメンバーによる演奏も、少なくとも2回、放送が確認できる。1944年9月10日の帝国プログラム「ドイツの巨匠による不滅の音楽」においては、シュトロス四重奏団にウィーン・フィル管楽アンサンブルのメンバーが加わって演奏されたシューベルト《八重奏曲ヘ長調》が放送されている¹¹⁴。同年4月2日にウィーン楽友協会大ホールにおいて放送と同一メンバーによるコンサートが開催されていることから、これと相前後して収録された音源が使用されたのであろう。この放送の3日後にあたる9月13日の20時15分から21時にはドイツ放送において、ベートーヴェンが弦楽器のために作曲したソナタを特集するプログラムが組まれた。この出演者に、ヴォルフガング・シュナイダーハンとフリードリヒ・ヴェーラーの名前も挙げられている。演奏され

た演目はラジオの番組欄から知ることはできないが、現存する音源から推測するならば、1942年にこの二人によって放送用に収録されたベートーヴェンの《ヴァイオリン・ソナタ第7番》の録音が放送された可能性はあるだろう¹¹⁵。

4. 総括

これまでの議論を整理し、本稿の結びとしたい。

1944/45年のウィーンにおける音楽シーズンは、シーズン開幕前に準備が行われていた。シーズン開幕直前にこの状況を一変させたのが、ゲッベルスが発した劇場閉鎖の指令である。多くの演奏家が演奏の機会を失う中、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団は演奏が許可された数少ない団体の一つとなる。劇場閉鎖後、このオーケストラが多くの時間を費やしたのは、ラジオ放送用に録音をすることであった。本稿で明らかにした数字で示すと、このオーケストラが放送の仕事を行った日数は1944年9月に10日、10月に11日である。前年の同時期と比較すると、1943年9月が3日、10月が0日であるため、劇場閉鎖後に放送の仕事が激増したことがわかる。これに加えて、シュナイダーハン四重奏団の例に見られたような、オーケストラ以外の録音も随時行われていた。つまり、オーケストラのメンバーの中では、多い場合には1か月の半分程度、放送関係の仕事に従事するケースもあり得たのである。

個々の録音を制作するにあたっては、十分に時間がかけられた。例えば、クラウスが9月に打診された1時間番組の場合、収録には3日間が費やされた。このような入念な作業が行われた理由として、ラジオ放送において録音が繰り返し使用されることがあった。今回、詳細に検討した1944年8月末から10月に収録された録音に関しては、再放送された事例は発見できなかったが、1944年8月以前の録音ではそれが確認できるのだ。そして、放送録音に従事した演奏者に対しては、十分な報酬が支払われていた。これもクラウスの例となるが、9月の放送録音に際し、彼は1回のセッションで1000ライヒスマルクに加え、長時間録音のための追加報酬として1000ライヒスマルクを受け取った（この追

加報酬は、再放送を念頭に入れたものである)。9月のベームの事例で見たように、オーケストラにもセッション毎に多額の金額が支払われていた。この事実は、それだけ多くの金額を投入できる環境が政府主導で整えられていたことを暗に物語っている。

1944年8月末から10月に収録された作品のレパートリーに着目すると、ヴァラエティーに富んだものであったことに気づかされる。ドイツ・オーストリアの作曲家では、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ヨハン・シュトラウス、ブルックナーといった古典派やロマン派の作品にとどまらず、フランツ・シュミット、プフィッツナー、リヒャルト・シュトラウスといったこの時代に生きていた作曲家の作品が演目になっていた。このほか、フランスの作曲家ではベルリオーズとビゼー、ノルウェーではグリーグ、さらにチェコのドヴォルザーク、イタリアのヴェルディとレスピーギの作品も収録する演目に含まれていた。演奏された曲目も、有名な作品と演奏頻度の低い作品の双方をカバーしていた。ウィーン・フィルはオペラの演奏にも長けたオーケストラであったため、モーツァルトの《後宮からの誘拐》やヴェルディの《オテロ》のような有名な作品に加え、演奏時間が1時間程度の秘曲も取り上げられていた。同じオーケストラでもこの当時のベルリン・フィルはオペラの演奏はしていなかったことを思うと、放送で求められた多彩なコンテンツの提供にウィーン・フィルが大いに貢献していたことがわかる。こうして、放送局にはウィーン・フィルの演奏による多数の録音がストックされることになり、新旧の録音を巧みに織り交ぜながら、ラジオのプログラムが編成されたのである。

放送されたラジオ番組は、新聞におけるアピールを通じて、ドイツの音楽文化のメインであることを聞き手に印象付けた。『フェルキッシャー・ベオバハター』の場合、重要な番組については予告が出され、放送終了後にはその批評が新聞に掲載された。ラジオの番組は、コンサートと同様に、積極的に論じられるものとなったのである。新聞の論説におけるラジオ番組扱い方の変化は、ラジオが「最小限の人員と物資の経費で、我々国民の最大多数の心を捉える」ツールとなったことを意味していた。しかし、このようなアピールを続けたと

しても、聴衆を十分に満足させられないことは明らかだった。『フェルキッシャー・ベオバハター』のウィーン版においてフルトヴェングラーの指揮によるブルックナーの演奏を論じた評者は、ラジオ放送の音響上の限界をそれとなく示していた。結局のところ、ラジオ放送が実演に完全にとってかわることはなく、ウィーンにおいて例外的に公開で演奏することを認められていたウィーン・フィルは、コンサートホールにおける公演の開催回数を増やしてゆくことになるのである。

*本研究は JSPS 科研費 JP26770071, JP17K02378, JP21K00218の助成を受けたものである。

注

- 1 本研究にあたっては、以下の図書館およびアーカイブから資料（文書・データ・録音）を提供していただいた。ここに記して、感謝したい。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団歴史アーカイブ、オーストリア国立図書館、ドイツ放送アーカイブ、ドイツ連邦公文書館、バイエルン州中央公文書館、ベルリン・ブランデンブルク放送協会。
- 2 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 20. 10. 1944, S. 2.
- 3 Wiener Philharmoniker. Konzertarchiv. <https://www.wienerphilharmoniker.at/de/konzert-archiv>（アクセス日：2021年8月31日）
- 4 拙稿「総力戦下のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団——1943/44年のシーズンにおけるクレメンス・クラウスとカール・ベームの指揮によるラジオ放送番組に関する研究——」（『桜文論叢』第96巻，2018年），492頁。
- 5 拙稿，前掲論文，492-493頁。
- 6 Österreichische Nationalbibliothek (ÖNB). Musiksammlung. F59 Clemens Krauss Archiv 158/ 1 -3. Clemens Krauss: Dirigir-Daten (Manuskript). 論証の過程でこの資料に言及する場合には、本文中に『指揮記録』と示す。
- 7 Gesellschaft der Musikfreunde in Wien. Konzertarchiv. <https://www.musikverein.at/konzertarchiv>（アクセス日：2021年8月31日）
- 8 Wiener Konzerthaus. Datenbanksuche. <https://konzerthaus.at/datenbanksuche>（アクセス日：2021年8月31日）
- 9 Neues Wiener Tagblatt, 24. 6. 1944, S. 3.
- 10 Neues Wiener Tagblatt, 23. 7. 1944, S. 3.

- 11 Das Kleine Blatt, 12. 7. 1944, S. 4.
- 12 Das Kleine Blatt, 20. 7. 1944, S. 4.
- 13 Neues Wiener Tagblatt, 10. 8. 1944, S. 3.
- 14 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 12. 8. 1944, S. 7.
- 15 Neues Wiener Tagblatt, 20. 7. 1944, S. 3.
- 16 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 16. 7. 1944, S. 4. この記事では招聘が予定されていた歌手も記されているが、本稿では、紙数の都合で指揮者のみを挙げた。
- 17 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 25. 8. 1944, S. 1.
- 18 Ebd.
- 19 Ebd.
- 20 Bundesarchiv (BA). R 55/558. Martin Schönicke an Heinz Drewes, 24. 8. 1944.
- 21 Manfred Permoser: Die Wiener Symphoniker im NS-Staat, Frankfurt a. M. (Peter Lang) 2000, S. 81f.
- 22 Maximilian Haas: Die „Gottbegnadeten-Liste“ (BArch R 55/20252a). In: Eine Institution zwischen Repräsentation und Macht. Die Universität für Musik und darstellende Kunst Wien im Kulturleben des Nationalsozialismus, hrsg. von Juri Giannini, Maximilian Haas und Erwin Strouhal, Wien (Mille Tre Verlag) 2014, S. 239-276.
- 23 Neues Wiener Tagblatt, 26. 8. 1944, S. 6.
- 24 Neues Wiener Tagblatt, 2. 9. 1944, S. 4.
- 25 Clemens Hellsberg: Demokratie der Könige. Die Geschichte der Wiener Philharmoniker, Zürich (Schweizer Verlaghaus) 1992, S. 497.
- 26 Österreichische Akademie der Wissenschaften. Wien-Film: Der Krieg macht die Musik. <https://www.oeaw.ac.at/detail/news/wien-film-der-krieg-macht-die-musik> (アクセス日：2021年10月12日)
- 27 Otto Strasser: Und dafür wird man noch bezahlt. Mein Leben mit den Wiener Philharmonikern, Wien (Paul Neff Verlag) 1974, S. 215.
- 28 ウィーン・フィルと映画のかかわりに関しては、以下の文献も参照。Fritz Trümpi: Politisierte Orchester. Die Wiener Philharmoniker und das Berliner Philharmonisches Orchester im Nationalsozialismus. Wien/Köln/Weimar (Böhlau Verlag) 2011, S. 225-227. この研究において述べられているのは、構想にとどまったこのオーケストラの出演映画の件である。
- 29 Deutsches Rundfunkarchiv (DRA). K000498322 (Archivnummer: 1941617). Giuseppe Verdi: Otello, Wiener Philharmoniker, Karl Böhm (Dirigent), 1944 (Aufnahmedatum). 今回の調査では、このテープをもとにしたと思われる1994年発売の Preiser の CD (CD 番号90230) を参照した。この CD のデータによると、収録は1944年8月である。
- 30 以下の新聞の「ラジオにおける夕べの時間」という記事で、ベームの指揮による

- 《オテロ》がこの日の夜に放送されると予告されている。Kleine Wiener Kriegszeitung, 19. 10. 1944, S. 7.
- 31 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 19. 10. 1944, S. 4. この日に《オテロ》が放送されると予告した同紙の当日の番組欄でも、曲目は《ジャコバン党员》とされている (Kleine Wiener Kriegszeitung, 19. 10. 1944, S. 5)。このことから、紹介記事の執筆後に番組が変更されたことがわかる。《ジャコバン党员》が放送されたことは、以下の演奏批評によっても確認できる。Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 22. 10. 1944, S. 6.
- 32 BA. R 55/558. Martin Schönicke an Hans Fritzsche, 12. 9. 1944.
- 33 BA. R 55/20616. Betr.: Konzertvereinigung Wiener Staatsopern-Chor, 21. 12. 1944. この文書においては、兵役等の職務から免除され、放送に出演している合唱団の人員は48名とされている。
- 34 拙稿「総力戦下のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」, 506-507頁。
- 35 DRA. K000662790 (Archivnummer: 1590128). Johannes Brahms: Liebeslieder, op. 52, Chor der Wiener Staatsoper, Karl Böhm (Dirigent), 18. 9. 1944 (Aufnahmedatum).
- 36 ウィーン・フィルの「放送記録」によると、《後宮からの誘拐》の収録日は9月4日、《ドン・ジョヴァンニ》は9月6日だが、本稿では同曲からの抜粋を収録した以下のCDの収録日を採用した。Mozart in tempore belli. Preiser 90249 (CD), ©1995. その理由を記しておきたい。この当時、ウィーン・フィルによる他の放送用のオペラ・スタジオ録音では、演奏時間が長いものに関しては、数日かけて収録が行われている事例が多数認められる。例えば、以前の考察でも記したように、1943年に収録されたヴェルディの《マクベス》でも、収録に2日を要している (拙稿「1942/43年のシーズンにおけるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のラジオ放送番組」, 『桜文論叢』第97巻, 2017年, 16-17頁)。なお、このベームによる《マクベス》の演奏時間は1時間53分ほどである。こうした事例を踏まえると、1944年9月上旬に収録されたモーツァルトの2曲は、いずれも演奏時間が2時間を超えるものであり、1曲につき最低でも2日は要したと推察される。オーストリアのPreiserから刊行されたCDに記された日付は、ウィーン・フィルが所有する、「放送記録」作成で参照されたのとは別の資料、あるいはテープを所有する放送局の資料に基づいていると考えられるが、このCDデータで考えたほうが他の事例との整合性が取れる。
- 37 Wolfgang Amadeus Mozart: Die Entführung aus dem Serail (The Abduction from the Seraglio), Vienna Philharmonic Orchestra, Rudolf Moralt (Conductor), Allegro Corporation OPD-1295 (CD), ©2001. このCDでは合唱団が表記されていないため、以下の資料によって補足した。John Hunt: Vienna Philharmonic and Vienna State Opera Orchestras. Discography 1905-1989. Vol. 1, London (John Hunt) 2000, S. 137. 録音日は本CDでは1944年9月6日だが、本文で述べたように、この日に録音されたのは《ドン・ジョヴァンニ》である。本CDと同一音源は、Galaより刊行された

- CD (CD 番号 GL100.501) などからも刊行されたが、ウィーン放送交響楽団による1945年録音と誤って表記されている。今回は調査できなかったが、ドイツ放送アーカイブに保存されているテープも1945年頃、ウィーン放送交響楽団と表記されているという。Deutsches Rundfunkarchiv (hrsg.): Sonderhinweisdienst. Wolfgang Amadeus Mozart 1756 - 1791 (PDF), Deutsches Rundfunkarchiv 2005, S. 12.
- 38 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 26. 10. 1944, S. 4.
- 39 Mozart in tempore belli. Preiser 90249 (CD), ©1995. 同音源は以下のCDにも収録されている。Wiener Opernlieblinge von seinerzeit. Preiser 90345 (CD), ©1998.
- 40 Bärbel Böhme und Wolfgang Adler: Musikschätze der Reichs-Rundfunk-Gesellschaft. Die Rückkehr von ca. 1.500 Tonbändern aus Moskau ins Berliner "Haus des Rundfunks", Berlin (Sender Freies Berlin Schallarchiv) 1992, S. 26. この音源は、ドイツのOrfeoから1993年にCD化されている (CD 番号 C315931B)。
- 41 Bayerisches Hauptstaatsarchiv (BayHStA). Intendanz Bayer. Staatsoper 1802. Hans Sachs an Clemens Krauss, 10. 9. 1944.
- 42 BayHStA. Intendanz Bayer. Staatsoper 1802. Reichssender Wien an Clemens Krauss, 14. 9. 1944.
- 43 BayHStA. Intendanz Bayer. Staatsoper 1802. Reichssender Wien an Clemens Krauss, 14. 9. 1944.
- 44 BayHStA. Intendanz Bayer. Staatsoper 1802. Reichssender Wien an Clemens Krauss, 22. 9. 1944 und Reichssender Wien an Clemens Krauss, 27. 9. 1944.
- 45 会場はウィーン・フィルの「放送記録」による。なお、9月21日の収録場所が楽友協会の大ホールであることは、以下の資料でも確認できる。BayHStA. Intendanz Bayer. Staatsoper 1802. Reichssender Wien an Clemens Krauss, 22. 9. 1944.
- 46 ウィーン・フィルの「放送記録」の注記においては、9月23日にもクラウスとの録音が行われたと記されている。本稿では、クラウスの『指揮記録』とバイエルン中央公文書館に残されているクラウスと帝国放送ウィーン局との報酬に関する文書を基に、9月18日、19日、21日の3日とした。
- 47 この曲順は、クラウスの『指揮記録』による。ベートーヴェンの《ロマンス》は、クラウスの『指揮記録』では複数形になっていることから、2曲とも収録されたと思われる。なお、《ファウストの劫罰》からの3曲の内訳は、クラウスの『指揮記録』には記されていないため、ウィーン・フィルの「放送記録」によって補完した。
- 48 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 8. 10. 1944, S. 4 u. 6. 厳密に言うと、番組表と番組紹介記事では、バルリオーズとハイドンの内訳は示されていない。ベートーヴェンとビゼーに関しては、作品名が記されている。
- 49 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 12. 10. 1944, S. 2.
- 50 DRA. K000614378 (Archivnummer: 1941757). Hector Berlioz: Tanz der Irrlichter aus „Faust's Verdammnis“ (La Damnation de Faust), Wiener Philharmoniker, Clemens Krauss (Dirigent), o. D. [RRG 1939-45].

- 51 Bärbel Böhme und Wolfgang Adler, a. a. O., S. 101.
- 52 この音源は、ベルリン・ブランデンブルク放送協会のご厚意により、ダビングを提供していただいた。
- 53 Bärbel Böhme und Wolfgang Adler, a. a. O., S. 122.
- 54 Ebd., S. 47. 同資料によると、このテープの管理番号はABW1525である。ABWと表記のあるテープにおいてウィーンで制作された例が多数認められることから、収録場所はウィーンであったと思われる。
- 55 Historisches Archiv der Wiener Philharmoniker (HAWPh). Depot Staatsoper. Mapped Rundfunk. Reichssender Wien an die Wiener Philharmoniker, 7. 9. 1944.
- 56 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 24. 10. 1944, S. 2.
- 57 Bruno Aulich: Was wir bringen! Eine Vorschau auf die künstlerischen Sendungen im Monat Oktober 1944. In: Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 13/14 (Oktober 1944), S. 148.
- 58 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 25. 10. 1944, S. 4.
- 59 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 29. 10. 1944, S. 6.
- 60 HAWPh. Depot Staatsoper. Mapped Rundfunk. Wiener Philharmoniker an den Reichssender Wien, 30. 9. 1944.
- 61 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 7. 1. 1944, S. 4.
- 62 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 13. 1. 1945, S. 2.
- 63 DRA. K000610572 (Archivnummer: 1941741) Franz Schubert: Entre-Act Nr. 3 B-dur aus „Rosamunde“, D 797, Wiener Philharmoniker, Karl Böhm (Dirigent), 22. 09. 1944 (Aufnahmedatum) ; DRA. K000613789 (Archivnummer: 1941743). Franz Schubert: Die Allmacht, D 852, Hilde Konetzni (Sopran), Wiener Philharmoniker, Karl Böhm (Dirigent), 23. 9. 1944 (Aufnahmedatum) ; DRA. K000613790 (Archivnummer: 1941743). Franz Schubert: Du bist die Ruh, D 776, Hilde Konetzni (Sopran), Wiener Philharmoniker, Karl Böhm (Dirigent), 23. 9. 1944 (Aufnahmedatum) ; DRA. K000613791 (Archivnummer: 1941743). Franz Schubert: Ständchen aus „Schwanengesang“, D 957, Hilde Konetzni (Sopran), Wiener Philharmoniker, Karl Böhm (Dirigent), 23. 09. 1944 (Aufnahmedatum). この注において示したそれぞれの録音の収録日はテープに添付されている情報であり、論者の見解を反映したものではない。
- 64 カール・ベーム指揮によるヨハン・シュトラウス二世の《こうもり》序曲は、1950年代に Urania から発売された LP レコード (レコード番号 UR-RS 7-21) に収録されている。
- 65 Wiener Philharmoniker spielen Johann & Josef Strauss 1929-1990. Deutsche Grammophon 435 335-2 (CD), ©1991. この CD では、件の作品は1943年10月28日にウィーン楽友協会大ホールにおける収録とされている。
- 66 DRA. K000614164 (Archivnummer: 1941753). Johann Strauß [Sohn] : Die

Fledermaus, Ouvertüre, Wiener Philharmoniker, Karl Böhm (Dirigent), o. D. [RRG 1939-45].

67 John Hunt, a. a. O., S. 134.

68 前注の John Hunt のディスコグラフィの138-139頁においては、9月24日から29日の間に9曲のレコーディングが行われたとされているが、そこには以下のCDにおいて7月収録とされているものも含まれている。本稿では9月の収録であることが確認できたもののみを挙げた。参照したのは以下のCDである。Wiener Opern-Raritäten von 1944, Preiser 90246 (CD), ©1999.

69 HAWPh. Depot Staatsoper. Mappe Rundfunk. Rundschreiben der Wiener Philharmoniker, 30. 9. 1944.

70 HAWPh. Depot Staatsoper. Mappe Rundfunk. Reichssender Wien an die Wiener Philharmoniker, 9. 10. 1944.

71 Ebd.

72 BA. R 55/556. Protokoll zur Programmsitzung am Mittwoch, 18. Oktober 1944, 15.00 Uhr unter Leitung von Herrn Ministerialdirektor Fritzsche.

73 John Hunt, a. a. O., S. 140. 予定されていた演目は、シューベルトの《未完成》とベートーヴェンの《レオノーレ》序曲第2番である。

74 Neues Wiener Tagblatt, 18. 10. 1944, S. 3.

75 Klaus Christian Vögl: Angeschlossen und gleichschaltet. Kino in Österreich 1938-1935, Wien (Böhlau Verlag) 2018, S. 400-408, 422-424.

76 Wiener Stadt- und Landesarchiv / Wienbibliothek im Rathaus. Wien Geschichte Wiki. Luftkrieg. <https://www.geschichtewiki.wien.gv.at/Luftkrieg> (アクセス日: 2021年10月12日)

77 1944年10月17日に収録されたフルトヴェングラーの指揮によるブルックナーの交響曲第8番の録音は、LPやCDで数多く発売されている。ここでは、フルトヴェングラーが1944年から1954年にかけてウィーンで行ったコンサートのライブ録音を集成したCDセットを挙げておきたい。Wilhelm Furtwängler. Wiener Philharmoniker. Die Wiener Konzerte, Orfeo C 834 118 Y (CD), © & ©2012.

78 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 19. 11. 1944, S. 4.

79 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 21. 11. 1944, S. 2.

80 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 17. 10. 1944, S. 2.

81 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 23. 11. 1944, S. 2.

82 HAWPh. Depot Staatsoper. Mappe Rundfunk. Reichssender Wien an die Wiener Philharmoniker, 9. 10. 1944. 余談だが、同年、ヘルベルト・フォン・カラヤンがベルリンにおいてブルックナーの《交響曲第8番》をラジオ放送用に録音した際、録音の技術に不満を述べたため、放送が中止された（拙稿「ナチス・ドイツ時代のクレメンス・クラウスとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団」, 428頁）。当時、このスケールの作品をラジオで放送する際には、音質の点であまりに問題が多かったと思

われる。

- 83 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 24. 12. 1944, S. 4. 放送で使用されたグリーグの録音は、1950年代にアメリカの Urania から LP レコードとして発売された（レコード番号 UR-RS 7-15）。
- 84 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 28. 12. 1944, S. 2.
- 85 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 26. 1. 1945, S. 2. この記事においてドヴォルザークの作品は「交響曲第4番ト長調 作品88」、現在の番号で言えば《交響曲第8番》とされている。ベームとウィーン・フィルがこの作品を収録したことは確認できないため、放送された演目は1944年10月収録の《交響曲第9番「新世界から」》と判断した。
- 86 HAWPh. Depot Staatsoper. Mappe Rundfunk. Reichssender Wien an die Wiener Philharmoniker, 9. 10. 1944.
- 87 クレメンス・クラウスの指揮によるリヒャルト・シュトラウスの《ブルレスケ》は、エリー・ナイをソリストに迎えて録音することも検討されていた。拙稿「ナチス・ドイツ時代のクレメンス・クラウスとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団」（『桜文論叢』第91巻、2016年）、423頁。ナイとともに《ブルレスケ》が録音されることは関係者の間で確実視されていたようで、1944年10月の番組予告によると、この曲は同月29日の帝国プログラム「ドイツの巨匠による不滅の音楽」において、リヒャルト・シュトラウス自作自演の《ドン・ファン》と《テイル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》（いずれもウィーン・フィル）とともに放送されることになっていった。Bruno Aulich: Was wir bringen! Eine Vorschau auf die künstlerischen Sendungen im Monat Oktober 1944. In: Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 13/14 (Oktober 1944), S. 146. 本文で述べたように、同曲の収録はソリストを変更して10月30日に行われることになったため、10月29日の番組ではヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮、ベルリン・フィルによるベートーヴェンの《交響曲第5番「運命」》が放送された。Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 29. 10. 1944, S. 4.
- 88 DRA. K000613820 (Archivnummer: 1941744). Richard Strauss: Till Eulenspiegels lustige Streiche, Wiener Philharmoniker, Clemens Krauss (Dirigent), 20. 10. 1944 (Aufnahmedatum).
- 89 DRA. K000498275 (Archivnummer: 1941616). Wolfgang Amadeus Mozart: 4 Sätze aus „Serenade D-dur (Posthorn-Serenade) für Orchester“, Wiener Philharmoniker, Clemens Krauss (Dirigent), o. D. [RRG 1939-45].
- 90 拙稿「1942年ザルツブルク音楽祭とラジオ放送」（『桜文論叢』第92巻、2016年）、3-9頁。グループ名とテープのアルファベットの因果関係について、端的な例を記したい。1942年ザルツブルク音楽祭におけるウィーン・フィルのヨハン・シュトラウス・コンサートの録音を番組で使用したのはグループF（「軽く人気のあるクラシック音楽」の担当）である。この録音は失われてしまったが、1943年元旦の放送で使用されたウィーン・フィルによる別のヨハン・シュトラウスの録音テープにおいて

は、F という記号が認められる。1943年の元旦の番組については、以下を参照。拙稿「1942/43年のシーズンにおけるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のラジオ放送番組」（『桜文論叢』第95巻，2017年），10-11頁。

- 91 BA. R 55/559. Betrifft: Wiederholung der Führergeburtstag-Sendung: 7. Sinfonie von Anton Bruckner, 17. 6. 1944. ヨッフムのテープに関するものではないが、モスクワからベルリンに返還されたテープからも事例を挙げておきたい。返還されたテープにおいては、コピーである場合、白いリーダーテープに Ko. とタイプされているという（Bärbel Böhme und Wolfgang Adler, a. a. O., S. XVII）。この目録では、リーダーテープのこの情報は記されていないものの、テープの日付は収録日とダビング実施日で明確に区分されている。この点に着目しながらこの目録を読むと、テープ番号に K のアルファベットが含まれるものの大部分は、ダビングが行われた日であることがわかる。
- 92 Völkischer Beobachter. Süddeutsche und Münchener Ausgabe, 27. 1. 1945, S. 6; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 6. 2. 1945, S. 4.
- 93 ÖNB Musiksammlung. F59 Clemens Krauss Archiv 88. Telefunkenplatte GmbH Aufnahme-Leitung an Clemens Krauss, 26. 9. 1944.
- 94 ÖNB Musiksammlung. F59 Clemens Krauss Archiv 88. Telefunkenplatte GmbH Aufnahme-Leitung an Clemens Krauss, 2. 10. 1944.
- 95 DRA. K000032978. Johann Strauß [Sohn] : Frühlingsstimmen, op. 410, Wiener Philharmoniker, Clemens Krauss (Dirigent), 23. 11. 1944 (Aufnahmedatum). この録音では、第3ワルツの冒頭3小節（186～188小節）が欠落している。
- 96 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 6. 12. 1944, S. 2.
- 97 HAWPh. Depot Staatsoper. Mapped Rundfunk. Reichssender Wien an die Wiener Philharmoniker, 12. 10. 1944. この作品の録音の段取りは10月9日に通知されていたが、リハーサルの時間が変更となったため、10月12日にあらためて予定が伝えられた。なお、10月9日の段階では、リハーサルは10月17日の14時から17時まで、楽友協会大ホールで行われることになっていた。HAWPh. Depot Staatsoper. Mapped Rundfunk. Reichssender Wien an die Wiener Philharmoniker, 9. 10. 1944.
- 98 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 22. 11. 1944, S. 4.
- 99 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 25. 11. 1944, S. 2.
- 100 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 22. 12. 1944, S. 4.
- 101 この2曲は、2013年にタイの Melo Classic より CD 化された（CD 番号 MC4001）。
- 102 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 3. 9. 1944, S. 5. この演奏評は以下を参照。
Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 10. 9. 1944, S. 4.
- 103 Rundfunkwoche Wien. 3. Jahr (1940), Folge 48, S. 8. 演奏評は以下を参照。
Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 8. 9. 1944, S. 3.
- 104 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 22. 10. 1944, S. 4.
- 105 演奏評は以下に掲載されている。Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 25. 10.

- 1944, S. 2; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 4. 11. 1944, S. 2.
- 106 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 26. 9. 1943, S. 5.
- 107 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 5. 9. 1944, S. 4.
- 108 Bruno Aulich: Was wir bringen! Eine Vorschau auf die künstlerischen Sendungen im Monat Oktober 1944. In: Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 13/14 (Oktober 1944), S. 149; Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 13. 10. 1944, S. 4. モーツァルト以外の2曲については、クラウスの『指揮記録』(特にウィーン・フィルと帝国放送協会の共催でコンサートと放送用収録が実施された「フィルハーモニッシェ・アカデミー」)やウィーン・フィルの「放送記録」から曲目を絞り込むことができる。ケルビーニは《アリ・ババ》序曲(1943年1月)であったと思われる。ハイドンについては、番組予告にソリストが紹介されていないことから、演目として交響曲が想定される。この前提で候補になる作品は、《交響曲第31番「ホルン信号」》(1941年3月)、《交響曲第83番「めんどり」》(1944年9月)、《交響曲第100番「軍隊」》(1944年4月)である。
- 109 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 24. 9. 1944, S. 4. 演奏評は以下を参照。Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 26. 9. 1944 S. 6.
- 110 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 15. 10. 1944, S. 4; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 14. 10. 1944, S. 4. 演奏評は以下を参照。Wiener Ausgabe, 24. 10. 1944, S. 2.
- 111 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 8. 10. 1944, S. 4.
- 112 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 12. 10. 1944, S. 2 u. 4.
- 113 拙稿「1942/43年のシーズンにおけるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のラジオ放送番組」(『桜文論叢』第97巻, 2017年), 17頁。
- 114 Kleine Wiener Kriegszeitung, 10. 9. 1944, S. 7.
- 115 ヴォルフガング・シュナイダーハンとフリードリヒ・ヴューラーによるベートーヴェンの《ヴァイオリン・ソナタ第7番》の放送用録音は、1985年に旧ソ連の Melodiya から LP レコードで発売された(レコード番号 M10 46983 006)。旧ソ連でレコード化されたナチス・ドイツ時代の音源の多くにおいては、戦後、ソ連軍に接収された音源が使用されているが、奇妙なことにこの演奏は、モスクワからベルリンに返還された1462本の録音テープの中に含まれていない。